

久留米大学の放射線医学講座は1933年の開講以来、先進的な医療機器や治療技術の導入を進め、福岡県南部における放射線医療の中核的役割を担ってきた。主任教授の田上秀一氏に現状と展望を聞いた。

講座の特徴は。

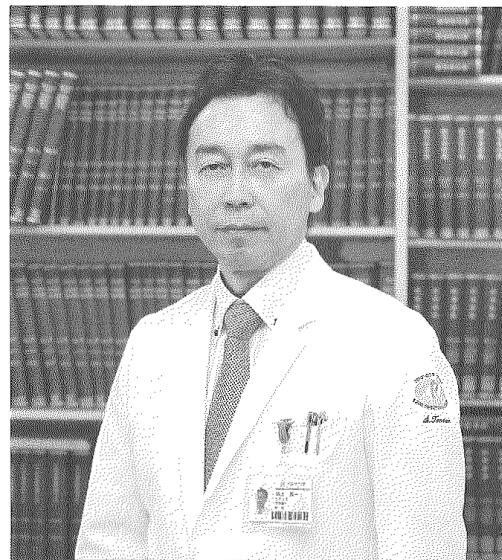
本大学医学部は先進的な画像診断技術や治療機器を可能な限り早期に導入し、診療と教育・研究に活用するという方針を一貫して掲げています。当講座もその流れを踏まえ、最新の撮影機器や画像処理技術、新規治療技術を積極的に取り入れるとともに、実臨床に適切に組み込みながら、いかに地域医療に還元できるかを念頭に取り組んできました。

当講座には画像診断

教育・研究について。

教育面では「ジェネラリスト兼スペシャリスト」の育成を軸に、全ての領域を学べる環境を整えるとともに、各領域に精通した指導医を配置し、IVR、胸部画像、骨・軟部神経、放射線治療などの小規模グループで専門性を深める体制を整えています。診療と並行し学会発表・論文執筆を進めており、研究と教育を一体的に行える点が特徴です。他方、領域ごとの独立性が過度に強まらないように、別領域のカンファ

放射線治療、IVR(画像下治療)といった専門領域があり、各領域が横断的に連携しているのも特徴です。それぞれ精通した専門家が互いの業務を補完しながら診療・教育・研究を進めています。



たのうえ しゅういち

田上 秀一 主任教授

1996年大分医科大学(現・大分大学)医学部卒業。豪日イタルパス病院、スベインLaFe大学病院、大分大学医学部附属病院内講師、久留米大学放射線医学講座講師、准教授などを経て、2024年から現職。

講座クロースアップ

久留米大学医学部 放射線医学講座

「ジェネラリスト兼スペシャリスト」を育てる

レンスに参加することで、各専門分野の臨床知識や研究手法の共有を促しています。全領域を学べる自由度の高さと、互いに助け合い切磋琢磨する文化があるため、それが講座の教育を支えています。研究面では、多施設共同研究を主導する診断グループをはじめ、IVR、骨・軟部、放射線治療の各領域で、臨床の延長線上にある課題を中心に成果を積み重ねてきました。こうした活動の基盤は、若手が意見を述べやすいカンファレンス運営を重視し、上下関係に左右されない議論環境の維持によって培われます。教授として、年長教員と若手のつなぎ役となり、意見交換の円滑化を図るとともに、治療器具を扱う企画など講座主催のイベントを通じて接点を広げ、教育とリクルートを強化しています。

課題と展望は。

現在の最大の課題は人材不足です。特に画像診断では検査件数の増加に伴い業務量が拡大しており、人員補充が追いついていません。収益性と画像診断の精度を保ちつつ一定量を確実に処理する体制が求められるため、AIによる診断補助を導入し、業務の合理化・効率化を進めています。

また25年、MRIとAIを組み合わせた最新の装置を導入しました。これは撮影時間短縮、高画質化というMRIのトレードオフの関係にある二つの要素の両立がAI技術で可能となり、患者負担の軽減と読影時間の短縮と精度向上に役立っています。さらに血流による血管壁への負荷や流速、方向などを可視化、定量化する周辺機器を備えており、血管病変の診断・予後予測・治療効果の判定に活用できます。これによって、より精密な診断と治療戦略の構築を目指しています。

今後は各領域の学会で主導的役割を担う教職員を継続的に輩出し、次代の研究者・臨床家が育つ講座づくりを進めること。将来的には、当講座で育った教職員が各分野で指導的立場を担い、地域医療の発展に寄与する姿が理想です。

本学は地方に位置しますが、だからこそ全国から注目される研究・臨床グループを形成し、存在感ある講座として発信していく必要があります。その実現に向けて、人材育成、研究環境、新技術の3本柱をバランスよく強化し、地域医療と大学医療の双方に貢献する体制を築くことが今後の大きな目標です。